論　文

＜帝国＞と＜植民地＞の交錯する場所

― ポストコロニアルな状況／情況と共同体の位相 ―

佐　藤　由　紀*

目次

はじめに
1．帝国主義と植民地主義の差異と共通性
2．植民地支配の論理が遺したもの―ポストコロニアルという状況／情況―
3．ポストコロニアルな＜場所＞の位相―キンケイドの「小さな場所」を手がかりとして―
4．原理的本質と真正性の主張にひそむもの
5．「ハイブリディテイ（異種混交性）」という言説のポストコロニアル性
6．自己認識と表象のポストコロニアル性
7．アイデンティティのポストコロニアル性
8．本質の＜複数性＞と＜単一性＞という言説のあらわすもの―＜他者＞の内在と自己外在性―
結論：ポストコロニアル性と植民地トラウマ

はじめに

今日，植民地主義の残していったもの―「ポストコロニアル」と評される状況／情況，さらには，そこから派生した新たな植民地主義―に対抗するものとしての「ポストコロニアリズム」という思想のあり方についての考察が各分野において行われるようになって久しい。このような中で，ポストコロニアルという状況について，様々な地域に関する，あるいは分野における事例研究，数多くの理論研究が行われてきた。しかしながら，「ポストコロニアル」の性質に関する超地政学的共通性についての考察はその重要性にもかかわらず，現段階ではまだ見受けられない。

先のような視座に基づき，本稿における考察を，今後，ポストコロニアルな複数地域において超域的・通文化的に発生している動向についての比較研究を進めてゆくための第一段階として位置づけることとする。具体的には，ポストコロニアルという状況／情況の発生の根源である植民地主義と帝国主義の思想的共有性について考察を行った上で，カリブ海のアンティーガにおけるポストコロニアルな現状について記述した，ジャメイカ・キンケイドの「小さな場所」についてのテクスト・リーディング的アプローチに基づいて，状況論的考察を行う。これらの考察を踏まえたうえで，ポストコロニアルという状況／情況，その状況／情況が生み出す共同体の様相と動態，ポストコロニアル性とはいかようなものであるのかについて考察を行い，その根底にあるものは何かということについて探求を行うことを目的とする。

尚，本稿中では「植民地経験」という用語を使用する箇所があるが，「ある共同体が直接的・

＊早稲田大学大学院社会科学研究科　博士後期課程１年（指導教員　池田雅之）

間接的に＜他者＞による統治下に置かれ序列の下に＜系列化＞された上，その主体性を剥奪されるという状態の経験」という位置づけの下に使用する。また，状況／情況という表記は，本稿で取り扱う「状況」が，その発生において内面的「情況」と不可分のものであると判断される際には併記し，区別して考察を行う際には個別表記とした。また，植民地という歴史経験に着目するにあたって「共同体」という用語を用いたのは，統治／支配する側が統治／支配される側を自国家へ回収あるいは＜系列化＞するという「植民地化」のプロセスを考えた場合，「国家」という単位で統治／支配する側と統治／支配される側とを明確に区別することは，状況／情況を不可視化してしまう可能性があると判断致し，政治的強制力とシステムによらない帰属意識の共同性を持つ集団という意味合いにおいて「共同体」という用語を用いることとした。しかしながら，「支配者」という意味合いでの「宗主国」に他の用語での置換が困難であると判断した部分については，「宗主国」という用語を使用している。加えて，「支配者」と「他者」を文脈に応じて使い分けているが，植民地下における，植民地化された側から見た「支配者」と「他者」は同義であるという基本的な認識に基づき使用していることを，ご理解いただきたい。

1．帝国主義と植民地主義の差異と共通性

帝国主義は，帝国の中心となる国家の文化的・政治的優越性という信念に基づいたイデオロギー的政策によって支えられてきた[Brooker: 1999: 160]ものであり，システム化されているという点において植民地主義と区別される。かつて帝国主義の範疇においては，あらゆる領域における「文明化」もしくは「近代化」の政策の促進が図られ，その体系的なヘゲモニーの維持が行われたが，第二次世界大戦以降の現代においては，かつての列強国家間での競合に起因する軍事的手段による征服や政治的支配によるものではなく，経済格差を利用した系列化と支配と従属の関係や，メディアを媒介とした文化や思想面における特定地域の＜帝国圏化＞といった，実体的な場所を必要としないかたちでの，ネオ・インペリアルとでもいうべき状況が発生している。

一方，植民地主義は，支配の対象をエキゾチシズムのフィルターを通してまなざし，自身より下位にあるものと位置づけ，支配を正当化するのに都合の良い，支配の対象である共同体の神話やステレオタイプを恣意的に創出し，支配を行う側の自己を理想とし，それと対極にあるものとして支配される側のイメージをイデオロギー的に構築してきた。植民地支配においては宗主国と植民地は優劣と主従の関係にあるとする理論が利用される。その過程において，植民地側では先のような支配者側の創出した言説を内面化することによって，自己を帝国民へと作り変えてゆく「自己植民地化」を行い，支配者という＜他者＞への自己同一化を達成しようとする動向が生じてきた。しかし，植民地において本国への自己同一化を図ってきた人々は，帝国圏の中で身の置き場を見つけることは出来ても，本国の中に居場所を見つけることは出来なかった。なぜならば，その本国こそが自分達を周縁化してきたものであったからである。このように，植民地政策は支配の対象を＜同化＞させようとすると同時に＜異化＞し，支配する側

の理想的自己の創造と＜他者＞を創出することによって支配対象の周縁化を図るという，＜回収＞と＜排除＞の操作がパラレルに行われてきた。

このような性質から，植民地主義は帝国主義と相互依存の関係にあると位置づけることも不可能ではなく，事実，帝国主義と植民地主義はその線引きが難しい部分がある。この点については，アーニャ・ルーンバの植民地主義と帝国主義についての以下の定義づけがそれを表しているであろう。

「領土の掠奪，物質的資源の収奪，他の地域や国の労働力を搾取し政治的，文化的な構造に介入することが植民地主義。グローバルなシステムが帝国主義。（中略）帝国主義と植民地支配とを区別しようというなら，時代で区別するより，空間で区別するほうが便利かもしれない。帝国主義もしくはネオ・インペリアリズムを，宗主国（メトロポリス）という場所に端を発する現象で，植民地という空間の制圧と支配につながる過程，と考えてみよう。そうすると，植民地支配あるいはネオ・コロニアリズムとは，帝国主義もしくはネオ・インペリアリズムの結果として起きること，あるいは帝国主義支配が植民地に残した影響となる。帝国主義国家は『宗主国（メトロポール）』から権力を発動する。植民地もしくはネオ・コロニーとは，権力が進入し支配する場所なのだ。帝国主義は公式の植民地なしでも機能できる（今日のアメリカ帝国主義のように）が，植民地主義は公式の植民地なしでは機能できない。」【ルーンバ：2001：23】

政治的・文化的構造に介入することが植民地主義ということであれば，かつて宗主国－植民地という関係にあった国家間における関係のありようは，今日でも見て取ることが出来る。また，グローバルなシステムが帝国主義であるということであれば，世界システムの中で優位性を持つ国家は，意図せずして帝国主義に加担している場合もあるということになる。支配の対象となる共同体を帝国圏へ組み込むにあたっては，その共同体の系列化が行われるが，同時に系列化の過程においては，オリエンタリズムのまなざしにのっとり，帝国圏内での序列化もが行われる。このような点から鑑みるとやはり，植民地主義と帝国主義を区別して考えることは困難なのではないだろうか。ルーンバが「植民地支配あるいはネオ・コロニアリズムとは，帝国主義もしくはネオ・インペリアリズムの結果として起きること，あるいは帝国主義支配が植民地に残した影響」と述べているように，植民地主義と帝国主義は，相互補完的に成立しているものと解釈することが可能であろう。しかしここで，ルーンバの論に加えるべきであるのは，植民地主義は帝国主義の結果生じるのみならず同時並行的に立ち現れる場合もあるということ，また，今日の状況を見ると，ネオ・コロニアリズムに限っていえば，公式の植民地，すなわち実体的場所性のある植民地を必ずしも必要とするわけではないということである。

また，帝国主義の定義としては，ヨハン・ガルトゥングの「構造的暴力と平和」における，中核（中心）と周辺という概念を用いたものがあり，帝国主義の核となる性質が表されているので引用しておきたい。

「帝国主義とは，中心国が周辺国に対し両国間に利益不調和が生じるようにその力を行使する

ことができる関係と定義できる。具体的には，帝国主義は中心国と周辺国との関係であり，そこでは一．中心国の中心部（cC）と周辺国の中心部（cP）とのあいだには利益調和が存在し，かつ二．中心国の内部よりも周辺国の内部に，より大きな利益不調和が存在し，さらに三．中心国の周辺部（pC）と周辺国の周辺部（pP）とのあいだには，利益不調和が存在する。［ガルトゥング：1971：75］」

ここでは，利益不調和という用語を「両当事者間の生活条件の格差が拡大するようなかたちで両者が結合している場合」，利益調和を「両当事者の生活条件の格差が縮小して零にいたるような形で両者が結合している場合」と定義づけている。国家圏の形成は支配を行う側を中心と設定し，自己拡大的にその周縁を同化させようとする方向性を持つが，文化・思想的な同化作用が働く一方で経済面においては格差が作り出され，それは国家圏の内部に組み込まれることによって潜在構造化され，文化的差異に基づく差別はそのかたちを異質性の過大評価に変えて潜在的に残存する。その結果，一国家圏内において宗主国と植民地に準じる関係が構築・温存されるのである。

帝国主義とは「国力あるいは経済規模の点において優位性を持つ共同体が，劣位にある共同体を系列化する自己拡大的な支配の形態」であり，植民地主義とは「支配する側の共同体が支配の対象となる共同体を自己領域内の下部に序列させつつ回収しながらも，＜異化＞された存在のままでいることをも強要し，それらを状況に応じて使い分ける支配の形態」であると定義づけることが可能であろう。

2．植民地支配の論理が遺したもの—ポストコロニアルという状況／情況—

植民地支配においては，国家の民族が多元的な起源を持つという混合民族論が＜帝国＞拡大の言説として，国家的純血性を強調する単一民族論が植民地支配の言説として，相互補完的に利用されてきた。前者は「混合民族であるがゆえに，他民族を同化吸収する能力に長けている」とする同化装置として機能し，後者は植民地人を＜異化＞し，排除する機能を果たした。

先のような＜同化＞と＜異化＞の言説は植民地側でも受容され，前者においては「多様の中の一」という自己定義において，後者においては支配者と自己が近親の出自にあるとする言説を持ち出すことによって，自己を支配者と同系列の存在として位置づけようとしてきた。その結果，植民地経験を経た共同体は，支配者の価値観を至上とする思想，セルフオリエンタリズムのまなざしを潜在的に持ち合わせる一方で，本国中心主義的なオリエンタリズムに抵抗するものとしての原理主義的な土着主義の中で自画像を模索することが常態化していった。そして脱植民地化した後，新たな自己のありようを模索しつつも，＜他者＞性の内在，自己に対する当事者性の不在によって，自己の本質が不在化しているデラシネ（根無し草）の状態に陥っているという事実と向き合わざるを得なくなったのである。

植民地支配は帝国主義と植民地主義の共同作業によって植民地化した共同体を系列化すると同時に周縁化する。それゆえ，植民地化された側は自己と＜他者＞の線引きが不明瞭になるということが起こりうるのである。植民地の，植

民地経験を通して形成された他者性は，支配者と自己という二者間のいずれか一方から見た場合の＜他者＞というものではなく，支配者と自己のいずれでもない中間というポジショナリティ In-Betweeneness において形成されるものである。従って，植民地経験を経た共同体が脱植民地化した後，旧支配者との二項対立的思考において自画像を形成しようとすることは，本来的に誤りである。にもかかわらず，先のような共同体が無意識下で，かつて自身を支配していた＜他者＞との対比において自己をまなざすということを未だ以って行ってしまうのは，自己が客体化されたままの状況／情況にあるからである。

先の論理にも明らかである通り，支配者は支配の対象に自分達の文化や価値観の完全な習得を要求しながらも，決して，自分達と全く同じになることを望んだわけではなかった。支配者は被支配者に＜同じ＞だが同等ではないものとしてあることを要求したのである。それゆえ，被支配者は支配者像を擬態し続けなければならないにもかかわらず，決して完全な同一化をすることは出来ないという矛盾する状態の中で，自己を形成してゆかなければならなくなった。そして，植民地経験を持つ共同体は，自らを抑圧すると同時に育んできた支配者の文化が自己の内部に構造化されている状況／情況に対し，意識的にならざるをえなくなっていったのである。その結果，支配者から＜異化＞されると自己のオリジナリティを否定してまでも支配者へ同化しようとする反作用が恒常化し，植民地経験以前の自己，すなわち，本来的な意味合いでの自己のオリジナリティに立脚することに違和感を感じるという状況／情況が生じていった。

それでは，このような背景のもとに発生しているポストコロニアルという状況／情況とはどのようなものであるのか。ポストコロニアルとは，＜他者＞からの植民地主義的まなざしに対する意識，政治的かつ領域的な支配の対象となる実体的場所を必要としたかつての植民地支配からかたちを変えた植民地支配―メディアによる意識操作，経済格差に起因する支配と従属の関係，消費文化による文化支配―に対して問題意識を持ちうる可能性を剥奪された状態，植民地主義の爪痕が潜在化され制度的支配が終焉してもなお，文化的・思想的支配に苛まれ，かつての支配者のあらゆる影響から逃れることが困難な状態，すなわち，植民地主義の遺物と新植民地主義のはざまを生きているという状況／情況，自己の本質を追い求めながらも，かつて自己を支配していた＜他者＞のオリエンタリズムのまなざしを内在化させてしまったがゆえにその影響から不可避であり，「どちらでもあり，どちらでもない」現状にとどまらざるを得ない状況／情況といえよう。旧植民地が脱植民地化してから，旧宗主国においては，植民地主義華やかなりし時代は現在とは切り離された過去のものとされ，ノスタルジアを持って振り返られるような論調がみられるようになり，かつて植民地であった共同体は脱植民地化と共に，植民地主義の呪縛から解き放たれたかのような錯覚に陥った。しかし実際には，現在においてもなお植民地主義の遺制はかつての植民地に影響を与え続け，さらに，新たな植民地主義が不可視的に定着しつつあるという状況が発生している。

3．ポストコロニアルな＜場所＞の位相
—「小さな場所」を手がかりとして—

それでは，ポストコロニアルという状況は具体的にどのようなものであるのか。ここでは，かつて＜帝国＞の下部構造に周縁的に系列化され，今日では不可視化された権力構造の下にかつての支配者へ従属的な立場にならざるをえないポストコロニアルな共同体の現状を如実に描出した，ジャメイカ・キンケイドの「小さな場所」のテクストリーデイング的アプローチを手がかりとして，ポストコロニアルという状況の具体像について考察を試みることとする。

今日，＜小さな場所＞は，かって自分達を支配していた国家の「正式な」構成員として吸収されるかたち，あるいは独立，いずれにしろ，かつての植民地というステータスからは脱却した。しかし，旧宗主国へと回収された＜小さな場所＞は旧支配者の共同体へ完全に同化したのであろうか。独立を選択した＜小さな場所＞は完全な「独立」を達成しえたのか。

これについては，現状を見れば，いずれについても肯定的見解を得ることは困難であろう。「小さな場所」では，このような状況を次のように描写している。

「私たちがけっしてその国の人にはなれないイギリス，とても遠くにあるイギリス，船に乗っても私たちには行くことの出来ないイギリス，私たちが何をしようとけっしてその一部になることのできないイギリス・・・(以下略)」【キンケイド:1997:45】

つまり，例えシステム上，ひとつの国家共同体を構成することになっても，同化しようと擬態し続けたとしても，決して，同じになることは出来ない。なぜならば，支配する側が支配対象に対して，自分達の文化や価値観の完全な習得を要求する一方で強烈な＜異化＞を行い，根本的な同化を阻んできたからであり，支配を受ける側もまたそれを認識しているからである。にもかかわらず，今日においても，その支配者の存在を表面的にしろ潜在的にしろ中心に置かざるをえないという状況は，植民地経験を持つ共同体の主体性を完全に剥奪する。

「私が育ったアンティーガがほとんど完全にイギリスという軸を中心にしてまわっていた，というような印象を私はあなたにあたえただろうか。そう，実際にそうだったのだ。私はイギリスを通じて世界と出会ったのであり，世界が私に会いたかったら，イギリスを通して会いに来なければならなかったのだ。」【キンケイド:1997:51】

植民地化とは，ある場所のオリジナリティを剥奪するということである。しかし脱植民地化するということは，オリジナルに戻るということではない。脱植民地化によって，植民地化以前と全く同じ状態に戻れるというわけではない。なぜならば，植民地経験を経た共同体は何らかのかたちで自己に対してオリエンタリズムのまなざしを差し向けるというスタンスが無意識的に組み込まれてしまうからである。そしてその結果，自己が何者であるのかを見失ってしまうという状況が発生する。

「私はこの場所（アンティーガ）を見る，私は

この人たち（アンティーガ人）を見る。そして，私は，自分を育てたものが何者なのか，自分は何者に由来するのか，見分けることができない。」【キンケイド：1997：84】

ポストコロニアルな共同体が自身に関して正確な説明，完結した説明をつけることが出来ず，共同体に降りかかった出来事に関して正確な説明，完結的説明をつけられないのは，脱植民地化した今日においても実質的に，主体性を剥奪されたまま存在し続け，主体的に物事を見ることも判断することも困難な状態に陥っているからである。大権に左右され続けてきた歴史が長きに渡り，また現在においてもそれは変わらないにもかかわらず，世界システムにおける自己の位置を認識することが出来ず，包括的に物事を捉えることが出来ないのはこのためである。それゆえ，自身に関係して問題状況が発生しても，危機意識を抱くことが出来ない。結果として，無批判にその出来事を受容した状態で存在せざるをえなくなる。やがてその出来事は共同体へ完全に吸収されて，共同体の物語の一部となり，それを含んだ状態が共同体の完結的なかたちとなるのである。

このようなポストコロニアルな共同体のありようは，言語状況にも現れている。

「母国も祖国もなく・・・（中略）そして何よりもつらいことに，自身のことばがない人たち。（というのも，この犯罪について語るのに私が使える唯一の言語が，当の犯罪を犯した犯人の言語であるというのは妙な話ではないか？）」【キンケイド：1997：48】

自身に対する，かつての支配者の暴力性を暴く時，そこで使用されるのはその支配者の言語である。抵抗としての自己表象において，その抵抗を見せる相手の言葉を用いなければならないというジレンマ。言語は支配のための道具でもあれば，アイデンティティを構築するための手段でもある。それゆえに植民地化の過程においては，自身の言葉で語る権利が剥奪されるのである。＜支配者＞の言葉をいかにして完璧に習得するかに心血が注ぎ込まれ，支配者の言語は上位言語へと祀り上げられ，被支配者の言語は下位言語としてその地位を貶められる。これにより植民地化された共同体の言語は，言語そのものは失われずとも，言語に宿る思考や思想，価値体系，そしてオリジナルな自己表現の手段を失ってしまう。結果，脱植民地化した後も，植民地経験を経た共同体は「オリジナル」に戻ることが不可能となってしまったのである。

4．原理的本質と真正性の主張にひそむもの

＜異化＞と＜同化＞の論理のはざまで植民地経験をしてきた地域では，支配者と自己を完全に区別して考えることも，同一視をすることも出来なかった記憶がトラウマ的に共同体へ深く刻み込まれており，脱植民地化した今日においても，未だ以って，かつての支配者からの不可避的な影響を受け続けている。

ポストコロニアルな共同体は，＜他者＞のエキゾチシズムとオリエンタリズムが複雑に絡み合った視線に沿うかたちで自己をまなざし，その＜他者＞の価値のファインダーを通して自画像を形成してきた。支配者の都合によって使い

分けられる＜異化＞と＜同化＞の理論のはざまで葛藤しつつ，自身が何者であるかということを模索し続けてきたのである。

植民地化の過程においては，植民地化される側に意識的にであれ無意識的にであれ，自己否定が強要される。この点から鑑みて，ポストコロニアルな共同体が自身の内部において価値を認めるものは＜他者＞によって価値が認められたものであるといえよう。それは，特殊性あるいは固有性というコンテクストにおいて価値を認められはするものの，高等なもの，普遍的な価値を持つものとしての評価を受けることはない。＜帝国＞内において序列化された価値観の下においては，植民地に出自を持つ，あるいは植民地において創り出されたものは下等なもの，亜流のものという位置づけがなされ，正当な評価を得ることはないのである。なぜならば，普遍性は支配的な文化のイメージに沿う形でイメージされる性質のものであり，普遍性という考え方自体が自民族中心主義的なものである【ルーンバ: 2001: 179】からである。

支配者のオリエンタリスティックな価値観は，植民地化された共同体に普遍性に対する強迫観念を植え付け，普遍性のヒステリックな希求の動向を生み出した。植民地化された共同体は自己否定を余儀なくされる中で，絶対的価値と普遍性を持つとされる，自身を支配している者のようになりたいと願うようになる。しかし一方で，そう願うことを恥じ，カウンター・アクトとして自身の「土着性」—すなわち，本質的オリジナリティ—を表象してみせようとする。

しかし，カウンター・アクトとして表象されるオリジナリティとしての「土着性」は本当にオリジナルであるのか。そこに＜他者＞のまなざしによる作り変えと操作が存在している可能性はないのであろうか。

「他者性」と「土着性」は，その根源を対極にするものの，派生の経緯を共にする外在性である。前者は＜他者＞すなわち支配者への同化を志向した結果生じた外在性であり，後者は否定されたオリジナリティの復権とアイデンティティーの回帰を志向した結果，ナショナリスティックな動向の中で，事実から乖離的に創出されたポスト・オリジナリティであるという点において，その外在性を否定しえない。このポスト・オリジナリティである「土着性」は，＜他者＞のエキゾチシズムが内在化された価値観に沿った自己のオリジナリティの再生産であるがゆえに，本質の疎外を強化する働きがある。なぜならば，先のようなかたちで＜発見＞された土着性の主張は，他者性という外在性を，＜他者＞のまなざしを通して再生産された＜原理性＞に置き換える行為であったからである。このような経緯によって，ポスト・オリジナリティである「土着性」の，オリジナリティとしての真正性の主張は，排他的かつ純血主義的な，原理主義的本質主義と，共同体の非現実的な真正性を生み出すという結果をもたらした。

植民地経験は実体験としてそれを経験していない世代にも受け継がれ，共同体の記憶として思想化される。植民地経験は継続性を持つ心理的経験として，脱植民地化した後もなお影響を与え続ける。このような状況／情況下にある共同体において発生する文化ナショナリズムは，植民地経験を経て客体化された自己に，主体性を取り戻し主権を握ることの出来る領域を獲得

しようとするときに発生する。ポストコロニアルな共同体の文化ナショナリズムにおいて想像／創造される共同体像はロマン主義的な土着主義の視座に基づいており，共同体の文化は原初的なかたちを保っているとされる。しかし，＜他者＞のまなざしが内在化された，土着主義的，本質主義的視点から見出される土着性や本質は，ロマン主義的に見出される過去の記憶を根拠として，＜真正である＞とされるものを復興させようとする動向を生み出し，その過程において「本質」の作り変えを行い，「伝統」を創造する。それゆえ，ポストコロニアルな共同体が文化ナショナリズムの中で「見出した」とする「土着性」「本質」「伝統」は，厳密な意味合いにおいて，本物ではない。

ポストコロニアルな共同体がナショナリズムの過程において紡ぎ出す共同体の物語は，共同体が自身の存在と固有性の証明となりうると評価した部分の拡大解釈によって意図的に再創造されたものなのである。このような物語を核とした共同体の創出は，歴史的・文化的統一性を強要し，共同体の物語とはそぐわない部分を排除してしまう危険性を多分に含んでいる。

5．「ハイブリディテイ（異種混交性）」という言説のポストコロニアル性

植民地下において，被支配者は支配者のものを自身のものさしで解釈し，自分達のものと混ぜ合わせることによってハイブリッド化することを通して，新たな自分たちの文化を作り出すことによって，植民地支配に抵抗してきた。全てを支配することは出来ないという，支配者に向けての抵抗の表象行為としてハイブリッド化を行ったと考えることは，カリブ海地域において，黒人奴隷達が白人支配者の所作や言語を模倣し，それを支配者に対して表象して見せることが抵抗の意思の表象であったという史実を事例として見ても，十分に可能であろう。

ポストコロニアルな共同体が主張する「ハイブリディティ」は，他者間の相互協調的関係性に基づく文化の複数性を語りつつも，文化的純粋性を前提条件とする，共同体統合のための一種の戦略である。しかしどうであろうか。植民地下において，支配者と被支配者の関係は相互協調的ではなかったはずである。「ハイブリディティ」が持つ利点の強調は，支配者／被支配者の関係に横たわる暴力性を不可視化し，かつまた，支配者と被支配者の文化が接触しえた環境があったということは，その植民地支配は厳格なものではなかったとする論理が創出されてしまう危険性がある。

「ハイブリディティ」という言説をして語られる純血的真正性も本質的複数性も，戦略的に創出されたものであって共同体の実性ではない。それでも，ポストコロニアルな共同体において「ハイブリディティ」が利点として語られてきたのは，ポストコロニアルな共同体の現状を肯定するにあたって，妥当性があったということなのであろう。では，その妥当性とは何か。

ポストコロニアルな共同体が主張するハイブリディティを生み出すひとつの装置として擬態（mimicry）が挙げられるが，これについてホミ・バーバは「支配をはぐらかすためのひとつの方法であった」【Bhabha: 1994: 123】としている。被支配者側の支配者の文化の模倣が完璧であったり，模倣されたものが完成されたものであったりすることは決してありえない。模

倣・擬態の結果生み出されるものは，オリジナルの完璧な複製ではない。擬態は行われる文脈によって，オリジナルとは異なるものを創出する。そして，再生産されたものは支配をする側と支配を受ける側の両方の要素を持つハイブリッドで両面価値的なものになり，被支配者は支配者の「被支配者は支配者の文化に近づくことは不可能である」とする言説をくつがえすことが可能となる。さらに支配される側は，自身を支配する側から借用したものを利用し，支配者と自己の間の克服不可能な差異をあえて強調してみせることによって，支配への抵抗を表明することすら行ったのである。

植民地の状態におかれている共同体の支配者の文化や価値観擬態は，支配者に対する文化的な抵抗とレトリカルかつ逆説的な模倣の形態である。それゆえ，支配者のありのままが純粋かつ完全に擬態されるわけではなく，擬態の瞬間ごとに置き換えや再構成が行われる。そしてその過程において，植民地状態にある共同体は，マスターに極めて近しいが完全形ではない両面価値的な主体として自己を再創造する。ポストコロニアルな共同体は，植民地のステータスから脱却してもなお，擬態の亡霊から逃れることが出来ず，本質の不在化と葛藤を引き起こす。こうして，ポストコロニアルな共同体は，その根ざすところの不明瞭性と不確実性ゆえに，自身の位置づけを明確にするための存在の固有性の根拠，普遍的純血性という神話的な共同体の物語を希求するようになるのである。たとえそれが本質から乖離したものであっても，自身の存在の正当性を証明するにあたって合理性と妥当性を持つものであれば，それは受け入れられる。その過程においては，想像の共同体像の主体化と，現在における状況／情況の客体化が行われる。その結果，ロマン主義的な懐古の視座に基づく「唯一無二の真正なもの」という位置づけの植民地化以前の共同体の歴史と混沌の現在とが切り離される一方で，両者間の連結，連続性をも同時に主張することが可能となるのである。この連続性の主張には「伝統」というタームが多用される。「伝統」は本来，内容よりも時間的蓄積や連続性が重視されるものであるが，ポストコロニアルな共同体が共同体の連続性を主張する際に「伝統」という位置づけによって利用される要素に必要とされるのは，時間的蓄積ではなく，内容の点における共同体の歴史との妥当性と，共同体の物語との共存可能性である。

共同体は本質的に境界線を必要とする。その領域内において形成されている固有で均質な空間は排他的である。ポストコロニアルな共同体は往々にして，共同体のハイブリディティを主張し，それゆえに＜他者＞に対する排他性という性質を持ち得ないかのような錯覚にとらわれがちであるが，実際には，共同体のハイブリディティを普遍的かつ統一的なものとして主張している点において，表層的な開放性と潜在的な閉鎖性を持っているといえ，またその主張するところのハイブリデイティは，＜他者＞による植民地化の歴史の痕跡を不可視化し，現状を肯定するための言説装置であるといえよう。そして言説は，歴史的・文化的文脈に深く根ざしたもので，何らかの文化的パフォーマンスの枠組みの中で表現されるものである。言説が展開すればそれは実践に影響を与え，その実践によってまた言説を実証するという相互補完的な関係性がそこにはあるのである。

6．自己認識と表象のポストコロニアル性

ポストコロニアルな共同体の自己表象は，対＜他者＞的に自己の固有性を表象することを目的とする場合，矛盾を含まざるを得ない。なぜならば，ポストコロニアルな状況下においては，自己と＜他者＞は必ずしも二項対立的関係として明確な線引きが可能なものとは限らないからである。

このようにあいまいな自己認識において対＜他者＞的に自己を表象しようとする際，戦略的に本質主義的イメージが表象されることがある。その過程においては，決して現実には存在しえないオーセンティックで純血的な自己イメージが表象されるという傾向がしばしば見受けられる。そこでは本来，検証不可能な文化や言語の純粋性が共同体の神話として創り出され，社会が成熟するにしたがって結果的に生まれてきた副産物に過ぎないものを起源としてすり換え，土着性という言説によって根っこを与える作業が行われる。このような一連の作業を通して，＜唯一無二の＞＜真なる＞自己を創出することは抵抗のひとつのありようなのである。

この過程において，ポストコロニアルな共同体は自己と＜他者＞の線引きを明確にし，自己の固有性を確固たるものとするために，セルフ・エキゾティシズムのまなざしによるステレオタイプが作り出されるのであるが，それは往々にして自己と＜他者＞の双方の価値観を反映した両面価値的なものである場合が多い。そしてこの両面価値性のゆえにテレオタイプは，現実には存在しえないものであるにもかかわらず，当事者によってすら，現実性を持つものとして認識されてしまうという状況が発生する。言うなれば，ステレオタイプとは，恣意的に創出された唯一無二の絶対的オリジナリティと起源の物語に基づいた原理主義的な表象と，オリエンタリズムのまなざしによって作為的に強調・記号化されてきた差異を不可視化させ，両面価値的で矛盾を内包する実像を隠蔽する機能を持つ権力装置である。この機能によって，再生産により記号化された差異は本質的なものとして認識されてしまうのである。自然で可視的に認識出来る様，イメージや差異を加工することこそ，ステレオタイプ化の目的である。

ポストコロニアルな共同体における自己認識は常に，＜他者＞の価値観のフィルターを通して形成されたイメージに影響を受けざるを得ない。＜他者＞によって創出された自己イメージを模倣的に表象し，その表象に対する＜他者＞の反応を通して自己を認識するというありよう。ポストコロニアルな状況下において＜他者＞によって創出されたイメージは，権力構造の中で恣意的に作り出されたものである以上，共同体の現実をありのまま投影しているものとは認識しえないであろう。

7．アイデンティティのポストコロニアル性

それでは，ポストコロニアルな共同体は，なぜかくも固有性，そしてその根拠の確実性を希求するのか。その理由については，アイデンティティの動態についての考察が手がかりとなる。以下の管啓次郎の「トロピカル・ゴシップ—混血地帯の旅と思考」の一節に最も良くあらわされているので，長くなるが引用したい。

「アイデンティティとは，再＝出発のためのひ

とつのやり方だ。というより，拒絶された遺産へと帰ってゆくことで，人は異なったいくつもの再＝出発，異なったいくつもの休止，異なったいくつもの到着をめざして，ふたたびスタートすることができる。アイデンティティは特異性を抑圧することなくみずからの複数性をよく語ることができる（中略）・・・結局，人が自分自身の輪郭を決定しようとしておこなうアイデンティティの模索は，それが細心なものであればあるほど，アイデンティティを行き崩す方向に向かわざるをえない。（中略）人が本当に同一性を証明してみせなくてはならないのは，あくまでも他人に対してのことだ。内面ではなく，外面の同一性。私には管理することのできない，私に与えられる「顔」。（中略）ある社会を支配する法にのっとって，きちんと自己の位置を登録できるなら，存在は少なくとも合法化される。」［管：1998：307］

アイデンティティというものが意識されるのは，その共同体の存在の確定性や安定性が失われる可能性が発生しつつある状況／情況においてである。そして，そのような状況／情況下においては，アイデンティティは，共同体の文化的特性をシンボリックに表象しうるもの―伝統芸能，音楽，料理といったものを通して，対＜他者＞的に発信することによって，その所在の確認が行われる。このような場合に立ち現れるアイデンティティは，本質主義的で現実からかけ離れた共同体像を表象の背景に持っているが，それは，＜他者＞への従属やアイデンティティ喪失という，現実にはらみうる可能性へのアンチテーゼとして必要とされるからである。

ポストコロニアルな共同体の人々は，自己領域における自己の外在性という受け入れがたい状況／情況のゆえに，自共同体の領域内にいる時でさえもディアスポラの状態にある。それゆえ，伝統や慣習的思考といった日常においては不可視的であるものを媒介として＜祖国＞という概念と連結し，ネットワーク的共同体を創出し，そこに依拠しようとする。それは，自己に内在する＜他者性＞，無意識的な自己の客体化，今日においても，帝国主義と植民地主義の遺構から自由ではなく，旧支配者からも，また自らの意識においても，旧帝国領域内の序列において周縁に位置づけられ続けているためにマージナルとして存在せざるをえない状況／情況に起因するものである。先のようなネットワーク的共同体創出の過程においては，強烈なノスタルジアの下に＜祖国＞がシンボル化され，＜祖国＞は本来の位置から分離的な別個の，理想主義的な＜祖国＞として再創造される。父祖の地から根扱ぎにされた共同体が中立性を持つことは困難である。結果としてディアスポラは，本来の＜祖国＞に対しても，現実に自己が帰属している共同体に対しても外在性を帯びることとなるのである。このように，共同体像の創出は本質的に，理想化した自己イメージを表象しようとする作用を持つが，理想的な自己イメージは対比可能な「望ましくない＜他者＞」が存在してはじめて成り立ちうる。共同体像が構築される過程においては，共同体の理想的イメージをかたちづくるような要素が寄せ集められ，恣意的に加工された上で本質に置き換えられるということが起こりうる。しかし，ポストコロニアルな共同体においては，本質的な両面価値性のゆえに，当事者が思い描く通りのかたちになることはない。

ポストコロニアルとは，不可視化された帝国主義と植民地主義が現在の時間軸において交錯する場所である。政治的には脱植民地化した今日においても，あらゆる側面において植民地主義的権力関係に支配され，中心主義的な価値観によって序列化されている状態にある。そして，ポストコロニアルな共同体は本質的なオリジナリティを喪失しているがゆえに，本質主義的な土着性を主張し，原理主義的なポスト・オリジナリティをオリジナリティに置換しようとする。擬態し続ける過程においてその本質を喪失してしまったために，自己のOriginality（起源性）の不明瞭性を否定しえず，それゆえに，自身の存在の確定性を希求するという動向がその根底にはあるといえよう。

8．本質の＜複数性＞と＜単一性＞という言説のあらわすもの—＜他者＞の内在と自己外在性—

ポストコロニアルな共同体の本質的＜複数性＞と基層の純血性／単一性の主張は，自己に対する外在性（あるいは，自己に対する当事者性の欠如，と言い換えることも可能であろう）ともあいまって，「自己の断片化」という状況を如実に表している。このような断片化の状況／情況は，スチュアート・ホールが「分節化／接合」という用語によって以下のように説明している。

「結びつきや分節化／接合によって形成された統一性は常に，そして必然的に『複合的な構造』である。つまりその構造において，事物はその差異を通して，また同様にその類似性を通して関係づけられる。（中略）そのことがまた意味するのは，その結びつきが一つの構造（分節化／節合された結びつき）であって，ランダムな関係ではないのだから，その諸部分の間には構造化された諸関係，つまり，支配と服従の諸関係が存在するということである。」[Slack: 1996: 115]

「いわゆる一つの言説の『統一性』とはまさに，異なった別々の諸要素の分節化／節合なのであって，それらの諸要素は必然的な『所属』を持たないがゆえに様々な仕方で再－分節化／節合可能である。ここで問題となる『統一性』とは，分節化／節合された言説と社会的諸力との結合だ。つまりこれらの結合によって，それはある特定の歴史的状況のもとで，必然的ではないにせよ連結されうる。」[Morley and Chen: 1996: 141]

スチュアート・ホールが「文化的アイデンティティとは本質ではなく位置性である」[Hall: 1990: 226] と述べているように，共同体に対する帰属意識は本質的に可変性を持ちうるものであるが，それが文化を媒介としたものである場合，帰属意識は共同体の自己認識と位置性によって変化するものであるといえよう。

「ポスト」という接頭辞が表しているのは，流動性と可変性，そして変容の途上にあるという状況／情況である。ポストコロニアルな共同体における本質性と不変性の表象，主体的な自己認識に基づいた自己表象といったものは存在するのか—本稿におけるこれまでの考察に従えば，その可能性は限りなく否に近い。

ポストコロニアルな共同体では，＜他者＞によって形成された自己イメージが自己の＜実

像＞として認識され，かつまた，共同体がそのイメージにすり合わせた共同体像を形成しようとする動向，さらにはそれがリアリティを持ち始めるという状況が生じている。その結果，まなざす側の＜他者＞とまなざされる側の当事者との間で，同様の共同体像が描出されることとなるのであるが，これは不自然な状況であると言わざるをえない。なぜならば，文化的コンテクストの点において，立場の異なる双方において同様の認識が持たれるということは，本来，発生しえないからである。しかし，＜他者＞と自己の境界線が曖昧にならざるをえないポストコロニアルな共同体においては，表象における＜他者＞との戦略的な相互依存関係に陥るということが起こりうる。にもかかわらず，ポストコロニアルな共同体は，自己の両面価値性を認めることは植民地化という＜負＞の歴史性を表立って認めることになるため，＜他者＞との戦略的な相互依存の一方で，想像の共同体イメージを創出し，それを自己の実像として置き換え，さらには想像の共同体イメージに基づいてアイデンティティを創造しようとする。そしてそこでは，不可視的戦略性を持ったイデオロギーやレトリックが用いられてきた。

結論：ポストコロニアル性と植民地トラウマ

本稿での考察において明らかである通り，ポストコロニアルという状況／情況そして＜－性＞は，帝国主義と植民地主義の交錯した場所，共同体に残された遺構である。

ポストコロニアルな共同体は，かつての＜帝国＞内における系列化／序列化の結果，下部構造として位置づけられた記憶の呪縛からいまだもって逃れることが出来ずにいる。繰り返される擬態の過程において主体性を喪失し，その起源までもが曖昧になり，＜他者＞支配により共同体が断片化されてしまったがゆえに，共同体の起源の純血性と存在の確実性を確認しようと，不断の一貫性と不変的真正性を象徴的に証明するようなロマン主義的な共同体の物語を創出する。しかし，ポストコロニアルな共同体は＜他者＞の擬態によって本質的な両面価値性を持つようになり＜他者＞によってステレオタイプ化された自画像の擬態によって分節化され，いずれつかずの不確定な存在となる。その存在の不確定性をhybridity（異種混交性）とheterogenity（雑種性）という言説によって隠蔽し，実際には確定的な帰属性のない中間領域の存在，あらゆる点においてmarginal（周縁的）な存在とならざるをえず，自己に対する当事者性が希薄である状態を本質的＜複数性＞の内在という言説によって不可視化するという動向が繰り返される―それが，ポストコロニアル性である。ポストコロニアルな状況／情況にあり，なおかつ，今日においては公式の国家共同体を持たない民族の，文化を媒体として喚起されるナショナリズムの動向，「ネイションなきナショナリズム」は，「植民地なき植民地主義」への抵抗運動ではないだろうか。

それでは，このポストコロニアル性に潜在しているものは何か。それは，ある共同体において，現在でも問題状況の発生の根源となっている，植民地経験に起因する克服しがたい無意識下の記憶，あるいは劣等感が元となっているトラウマ―植民地トラウマである。先のようなポストコロニアル性が形成される背景となっている要因としては，①共同体の軸となるもの―思

想，価値体系など—が両面価値的であり，なおかつ，旧支配者の価値体系に対して自己のそれを下位に位置づけることが無意識下において恒常化しているという情況，②被植民地経験の記憶を持たない世代が，かつて支配者の立場にあった<他者>とその共同体に対して，不信感と違和感を潜在的に持っている状態，③旧支配者による同化の権力作用に対してあえて自己を異化することによって抵抗するにもかかわらず，異化されると同化しようとするという反作用の発生，④オリジナル・アイデンティティと旧帝国民としてのアイデンティティのダブルスタンダードなアイデンティティのはざまでの葛藤，が挙げられるが，現段階においては推測の余地を出ない。

ポストコロニアルという状況／情況と文化ナショナリズム的言説と動向の発生の関係，文化ナショナリズム的言説と動向の性質，そして，言説と動向の発生の根源的かつ主体的要因についての追求はまだ限られた事例が見られるのみにとどまっている。ポストコロニアルという状況／情況が生み出している様々な問題状況ついて考察を進めてゆくにあたっては，現在発生している文化ナショナリズム的言説と動向の性質と，発生の根源にあるものが何であるのかということについて，探求が必要とされるのではないだろうか。今後は，ポストコロニアルな状況／情況下にある地域あるいは共同体の文化ナショナリズム的動向の発生と植民地トラウマとの関係について，同様の動向が発生している複数地域間の比較研究を通して，考察を進めて行くことと致したい。

〔投稿受理日2006.11 24／掲載決定日2006.11.30〕

参考文献

岩崎　稔「ポストコロニアルにおける記憶と暴力について」(姜尚中　編「ポストコロニアリズム」作品社，2001年．139頁～141頁所収)

キンケイド，ジャメイカ（旦　敬介　訳）「小さな場所」平凡社，1997年．

管啓次郎「トロピカル・ゴシップ—混血地帯の旅と思考」青土社，1998年．

Hall, Stuart (1990) 'Cultural identity and diaspora'. In Rutherford (ed.) (小笠原博毅　訳「文化的アイデンティティとディアスポラ」(『現代思想臨時増刊：スチュアート・ホール』青土社，1998年)

Brooker, Peter (1999) "Cultural Theory: A Glossary" (有元　健・本橋哲也　訳「文化理論用語集：カルチュラル・スタディーズ＋」新曜社，2003年．

本橋哲也「ポストコロニアリズムの思想的現在性—理論と現実の狭間で—」(姜尚中　編「ポストコロニアリズム」作品社，2001年．30頁～36頁所収)

ルーンバ，アーニャ著（吉原ゆかり　訳）「ポストコロニアル理論入門」松柏社，2001年．